

何不自由ない生活が与えたもの

最近の事件を見ていると、「経済的な豊かさ」が子供達にとってよい影響を与えるのかどうか疑わしく思えるときがあります。

もともと「子供に不憫な思いをさせたくない」という親心その根底にあり、それは高度経済成長の初期に子供時代を過ごした親御さんの、我が子に対する愛情表現の一つであることは疑う余地がありません。当時は欲しいものを親からすべて買ってもらえたわけではなかった、そんな思いを我が子にはさせたくない。だから「友達はみんな持っている」と子供に言われれば、ムシキングのカード・ゲーム機・携帯電話・パソコン・子供部屋と何とかして与えることができるならと与えてきたのではないのでしょうか。

またこれには少子化の影響もあるでしょう。一昔前のように兄弟が4名、5名といた頃ならば、子供全員がすべて新品・最先端のものを買ってもらえる経済的な余裕もなく、衣類や文房具などは「お下がり」と相場が決まっていました。

かくして経済的に繁栄したこの国の中で、子供達は欲しいと思うものを我慢するとか、辛抱する必要がなくなりました。彼らにとって欲しい物が手にはいるのが自然であり、買ってもらえる権利をもっているとまで思いこんでいる感じさえします。

ただここで今一度考えていただきたいのは、一人の人間が成長する過程において、本人の思い通りにならないことを経験することは「不幸」なことなのかということです。

人は一人だけで生きていけないものだけに、大人になっていく過程では必ず他の人との関わりにおいて自分を抑えることも時には必要となります。自分の思い通りにならないからといってやけを起こしたり、相手を傷つけたり、自分の殻に閉じこもったりする「いい年になった子供」を前に、年老いた親にはもはやなすすべがありません。

喜び、楽しみ、悲しみ、怒り、恐れ、いろいろな感情をいろいろな経験から得ることで精神的にバランスの取れた一人の人間に育つものだと思います。それらはまだ若くて柔軟な心を持った時期にこそ経験すべきだと思います。

耐えること、辛抱すること、我慢すること、あきらめること、もちろん何もかもそうではまわってしまいますが、思い通りに行かないことが9つあるからこそ、1つうまくいったことに喜び、感謝する心が芽生えるものではないのでしょうか。

子供をかばい、守ることだけが親の任務ではないのではありませんか。